

江戸時代の年賀状



新春の只度月や盛し候に

喜ぶくは機嫌よく遊ばされ

恐悦存じ奉り候、まずは年始のご祝儀

申上げたくかくの如くに御座候、恐惶謹言

伊勢屋

備次郎

正月二日

拝み出度目申出度く申し納め候、
ますますご機嫌よく遊ばされ
恐悦に存じ奉り候、まずは年始のご祝儀
申上げたくかくの如くに御座候、恐惶謹言

江戸の百姓宿(訴訟などで地方から出てきた者を宿泊させた宿屋、訴訟手続きなども代行した)伊勢屋の年始挨拶状です。挨拶状は、顧客や知人に配布されました。年頭の挨拶文とともに目出度い三河万歳の挿絵が入っています。2人の絵柄の中には、この年(文久4年(1864))の大的月(三・五・七・八・九・十一)と小的月(正・二・四・六・十・十二)が書かれ、絵巻となっています。百姓宿は、公事宿・出入宿・郷宿などとも呼ばれ、村ごとに利用する宿が決まっていたようです。

文久四年(1864)

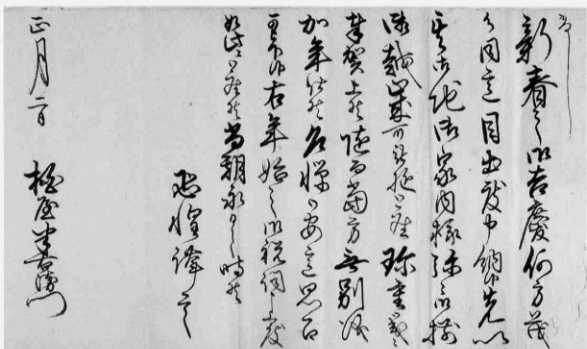
新春のお慶び目出度く申し納め候、
ますますご機嫌よく遊ばされ
恐悦に存じ奉り候、まずは年始のご祝儀
申上げたくかくの如くに御座候、恐惶謹言

正月二日

伊勢屋
御百姓宿

伝次郎

猶々、御出府の節、相変わらずご福屋成し下され御最
寄り御慰意様方へ宜しく御座候御推挙の程、
願ひ上げ奉り候、以上



新春の只度月や盛し候に
喜ぶくは機嫌よく遊ばされ
恐悦存じ奉り候、まずは年始のご祝儀
申上げたくかくの如くに御座候、恐惶謹言

伊勢屋

備次郎

正月二日

正月二日

柏屋半右衛門

これは、一般的な年頭の挨拶状です。当時の一般的な書状の形式です。最初の文は年頭の決まり文句で、今でいうと「あけましておめでとございます」にあたるところです。また、最後の「恐惶謹言」は手紙文の終わりに記す挨拶語です。中の文面もほぼ一般的な挨拶文です。内容的には、「そちらの皆様お慶びなく新年を迎えられたことと存じます。当方も特に変わりありませんので安心してください。改めて年頭のお祝いを申し上げます。末永くお元気に」というところでしょうか。

新春の御慶び目出度く申し納め候、
ますますご機嫌よく遊ばされ、
恐悦に存じ奉り候、まずは年始のご祝儀
申上げたくかくの如くに御座候、恐惶謹言

正月二日

伊勢屋
御百姓宿

伝次郎